

令和3年度  
劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
成果報告書

団 体 名	一般財団法人北上市文化創造	
施 設 名	北上市文化交流センターさくらホール	
助 成 対 象 活 動 名	人材養成事業・普及啓発事業	
内 定 額 ( 総 額 )	2,149	(千円)
	公 演 事 業	0 (千円)
	人 材 養 成 事 業	263 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	1,886 (千円)

(2) 令和3年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	いわての演奏家連携育成事業「いわての演奏家とつくる音楽会」プログラムづくりとアウトリーチ	R3/12/5、12/19 R3/1/27、1/28、2/4	研修講師：野尻小矢佳 第3期登録アーティスト：木戸口夏海、黒澤里美 コーディネーター：さくらホール企画事業職員、前沢ふれあいセンター職員	目標値	399
		さくらホール小ホール 前沢ふれあいセンター 北上市内小学校、学童 保育所		実績値	555

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和3年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	子どもの舞台芸術体験事業キッズアート	R3/5/18、6/29、 7/27、9/7、9/28、 10/5、10/26、11/23、 11/30、12/14、 12/28、R4/1/11、 1/18、1/25、2/22、 3/6、3/15	講師：山田うん、川合ロン、菅家奈津子、御園生瞳、名須川明子  音楽劇：宮沢賢治原作「雪わたり」	目標値	677
		さくらホール 小ホール		実績値	273
2	みんなART おたがいさまライブ事業	R5/1/15	出演：立川志の太郎、林家楽一	目標値	110
		さくらホール 大アトリエ 小ホール		実績値	104
3	アウトリーチ事業	R3/11/2、12/17、 R4/1/14	普及啓発事業2、4のアーティストによるアウトリーチ(※普及啓発事業1は中止)  【出演者】立川志の太郎、佐藤采香、清水初海、野尻小矢佳、磯田日向子 5名	目標値	180
		北上学童保育所、北上 市内小学校		実績値	310
4	クラシック音楽普及のためのコンサート事業：きたかみサロン音楽会シリーズ	R3/11/3、12/18	Vol.1 【出演者】佐藤采香、清水初海 2名 【演目】加藤昌則：軒下ランプ他  Vol.2 【出演者】野尻小矢佳、磯田日向子 2名 【演目】J. パッヘルベル：「カノン」他	目標値	200
		さくらホール 小ホール		実績値	218

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
<ul style="list-style-type: none"><li>■ 社会的役割への位置づけ さくらホールは『文化芸術を通じた心豊かな地域社会の形成』を最大のミッションに掲げ運営されている。令和3年4月1日、設置者である北上市は岩手県内初となる『北上市文化芸術基本条例』を施行した。さらにその条例に基づき、北上市文化芸術推進基本計画の策定に取り組んでいる。北上市におけるさくらホールの役割はさらに大きくなっている。※コロナ感染症拡大により9年間の計画に変更。</li><li>■ 地域の特性 国勢調査の結果、全国の市別で人口増加市として、東北管内では4市が記載されている。微増ながらも仙台市に次ぎ、北上市が2番目である。北上市における市民の定義は、市内居住者以外にも市内で働くもの、学ぶもの、市内に事業所を置く事業者、まちづくり活動をする団体、市内で文化芸術活動を行うもの、市内で教育、保育に携わるものを市民としている。市民の交流を生み出す拠点として、さくらホールの存在価値は大きい。</li><li>■ 事業の組立と予定通りに事業が進んだか VISION 01『うるおい』、VISION 02『ふれあい』、VISION 03『にぎわい』、VISION 04『あんてい』という、4本の柱で計画に沿った事業展開を行っている。それでも、令和3年度上半期は、事業を抑え気味に展開し、下半期より事業を再開していく計画であった。令和2年度と異なり、事業を中止するのではなく、コロナ対策を講じ をつつながら開催していく方針で進めていくことができた。それでも普及啓発事業『子どもの舞台芸術体験事業キッズアート』に関しては、首都圏から講師陣が来館するので、そこに関しては慎重にならざるを得なくなり、</li></ul>
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
<ul style="list-style-type: none"><li>■ 文化的意義 北上市が「北上市文化芸術基本条例」を制定したことで、設置者である市と指定管理者である財団が協議をし、それに沿った形での事業を推進していくことが、地域における文化・芸術水準を上げていくことにつながると考える。特に「普及啓発事業」全般において、文化芸術のすそ野を広げる事業内容を展開している。</li><li>■ 社会的意義 さくらホールが地域社会の文化芸術の中心として位置づけられ、大・中・小ホールと21のアートファクトリーと呼ばれる小部屋を保有していることで、規模に応じた「人材養成事業」「普及啓発事業」の事業展開を可能にしている。21のアートファクトリーを有することで、文化芸術文化活動も可能にしている。さくらホールを訪問すれば、アートファクトリー利用者から何らかの文化芸術活動に触れあうことができ、他方、大・中ホールで、文化芸術に親しむ市民にとって、社会的役割は大きいといえる。</li><li>■ 経済的意義 地域経済においては、主に首都圏から出演者、講師陣が東北新幹線を使用するのはもちろん、市内移動には市内のタクシー会社を使用することも多い。宿泊も市内のホテルを使用する。ごく当たり前のことではあるが、劇場を有し、この事業プログラムを実施していくことで、地元経済にも貢献していると考えられる。</li></ul>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

#### ■ 人材養成事業の目標

「いわての演奏家連携育成事業」指標設定の考え方は次のとおりであり、目標を達成できたといえる。

【地域の人材（演奏家2名、コーディネーター2名）養成することにより、継続的に質の良いアウトリーチを実施する】

・登録した2名の演奏家で、対象者に合わせたプログラムを作成し、地域内で8回実施できた。昨年は勤務先の都合により活動できなかった演奏家が、今年はそのうちの6回を実施することができた。アウトリーチ実施先のプログラム満足度は、目標を若干下回る90%（目標95%）であったものの、継続希望は100%であることから目標は達成されたといえる。

・アーティストからコーディネーターに対する評価も4.5（目標3）であり、目標は達成された。

・アウトリーチラボも今年は開催することができ12人（目標15人）が参加し、ほぼ達成できた。

#### ■ 普及啓発事業の目標

【市民誰もが文化芸術に親しむ機会を提供する】

一つの事業例として「みんなART おたがいさまライブ事業」が挙げられる。未就学児のいる家族や障がいのある人などの誰もが一緒に舞台芸術を楽しむことのできる機会を提供し、新しい表現に触れ舞台芸術に楽しむ人を増やすという目的で始めた事業である。その結果、今後もバリアフリーコンセプトの鑑賞公演継続希望のアンケートが、87.5%（目標は85%）であった。さらに、そのアンケートには「この企画のおかげで初めて我が子と落語（寄席）を楽しめました。」「手話、ちびっこもすわれるエリア、すごくよかったです。小さいころにこういうところが欲しかった。」が多数寄せられ、小ホールでの舞台づくりもバリアフリーであり、小さな子どもから落語好きなお年寄りまで、幅広い年齢の方々に楽しんでいただくことができ、目標を達成できたといえる。

【文化芸術の取り組みを通じて、地域の関係機関との連携・協力を積極的に進める】

「アウトリーチ事業」がまさに受け入れ先の確保として地域との連携、協力が不可欠であるが、さらにコロナ感染症が拡大期にあった令和3年度であっても快く受け入れていただいた施設があったことはこの事業に対する理解が進んでいるといえる。残念ながら拡大期と重なった「キッズアート（うたとダンス）」講師による4回のアウトリーチは中止としたが、「みんなART おたがいさまライブ事業」出演者のアウトリーチは、子どもたちに特に感染の広がりを見せたオミクロン株拡大直前であったにもかかわらず、感染対策を講じつつ、2カ所の学童保育所で合計190名の児童が、学童との連携にて開催することができた。「キタカミサロン音楽会」出演者によるアウトリーチは、比較的感染が落ち着いていた時期もということも重なり、予定していた市内小学校3カ所で4回のアウトリーチ活動を無事に終えることができた。15年間で147回実施し、約4,374人が参加している事業であり継続してきた。コロナ禍においては目標としていた老人福祉施設等の訪問はできなかったが、アウトリーチを希望する関係機関は増えているので、目標は達成できたといえる。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

- 令和3年度における新型コロナウイルス感染症対策としての開催可否判断基準  
令和3年度事業計画の際、さらに新型コロナが拡大する可能性を踏まえ、財団として上半期は事業を抑え、下半期に向けて再開していく計画としていた。それでも①直近1週間の新規感染者数(対人口10万人)が15人未満であった場合は来館可能②緊急事態宣言が出ているエリアからの往来は禁止③蔓延防止宣言も同様④PCR検査が陰性であること等を決まり事として実施することとした。
- 人材養成事業に関する事業期間とその計画について  
「いわての音楽家育成事業」では当初計画ではそれぞれが2回ずつ開催目標としていたが、開催時期が上記開催基準をクリアしていたので開催することができた。さらに開催回数目標もそれぞれ2回ずつとしていたが、上回る申し込みを頂戴した。その後、一部申込者からコロナ感染症により変更があったものの、合計8回実施することができ大幅に上回ることで目標は達成された。
- 普及啓発事業とその計画について  
「みんなART おたがいさまライブ事業」「クラシック音楽普及のためのコンサート事業」に関しては計画通り進み達成できた。「こどもの舞台芸術体験事業キッズアート」に関しては、余裕をもった計画であったが、首都圏の緊急事態宣言発令や岩手県独自の緊急事態宣言(8/12~9/17)による館自体の閉鎖により、計画の変更が余儀なくされた。「アウトリーチ事業」も、キッズアート講師にかかわる4回分が中止となった。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

- 人材養成事業に関する事業費が計画通りであったか  
「いわての演奏家連携育成事業」に関しては、要望費の割合が88%であるので、当初の計画通り達成できたといえる。
- 普及啓発事業に関する事業費が計画通りであったか。  
「こどもの舞台芸術体験事業キッズアート」は、首都圏の緊急事態宣言発令や岩手県独自の緊急事態宣言(8/12~9/17)による館自体の閉鎖により、講師陣が来館できず、事業計画に大幅な変更が発生したことにより、要望費42%となり、内容も縮小せざるを得なかったため、計画通りに進まなかった。  
「みんなART おたがいさまライブ事業」は、予定通り順調に開催できたが、チケット売上げが好調だったこともあり、ラジオ広告費、チラシ印刷費、ダイレクトメール送料、PCR検査費用(他館で直前に検査したため)などの事業費が減になり、要望費66%となった。差異は若干あったが、事業としては成功といえる。  
「アウトリーチ事業」は、首都圏の緊急事態宣言発令や岩手県独自の緊急事態宣言(8/12~9/17)による館自体の閉鎖により、その期間と重なった、キッズアート講師陣によるアウトリーチ事業は中止となり、その分の交通費、PCR検査費用等の経費が軽減し、要望費40%と大幅な事業費の差異が発生した。この期間外のアウトリーチ事業は、順調に終わることができたので惜しい結果であった。  
「クラシック音楽普及のためのコンサート事業」は、それぞれの公演チケットが完売し、追加分のチラシ印刷費が不要となり経費が軽減され、要望費79%で終わることができたため、ほぼ計画通りであった。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

#### ■ 人材養成事業

##### 「いわての演奏家連携育成事業」

地域の演奏家にアウトリーチやコンサートプログラムを実施する機会を提供すること、それに伴うコーディネーターの養成、ホールに足を運びにくい方々へ、アウトリーチを通じてクラシック音楽を提供していくことを目標としている。令和3年度に関しては、昨年、新型コロナウイルス感染症の対策として、勤務先の都合により活動できなかった演奏家が、今年はアウトリーチを中心に8回のうち6回することができた。保育所で2回、小学校で4回開催し、地域のアーティストとしての認知度も上がった。もう1名の登録アーティストはアウトリーチに加え、地域のアーティストとしてコンサートも開催できた。中ホール（450席）で開催し、200名の入場目標に対し248名の入場者があり、地域のアーティストとして盛況のコンサートで終える

ことができた。当たり前のことではあるが、地域の文化芸術拠点としてさくらホールが存在し、この事業推進のために財団があり担当職員がいて、そこには専属の舞台職員やNPO法人がフロントスタッフとして加わり、地域のアーティストを育成していく重要かつ優れた事業であったといえる。（※100%入場可能であったが、中止や延期を避けるため、50%入場としての対策もとれる中ホール開催とした。）

#### ■ 普及啓発事業（特記すべき事業）

##### 「みんなART おたがいさまライブ事業」

未就学児のいる家族や障がいのある人などの誰もが一緒に舞台芸術を楽しむ機会を提供し、舞台芸術の表現に触れる感動を提供し、楽しむ人を増やすことを目的に掲げている。令和3年度は、こども落語会の本公演に加え、公演日当日の午前に、落語、紙切りワークショップを開催した。その前日には、落語家によるアウトリーチを学童2カ所で開催することができた。

本公演は小ホールで開催されたが、小ホールは平土間型式となっており、事業担当者、舞台担当者のアイデアを結集した舞台製作で開催された。ノンステップで入場できるように、車椅子やストレッチャーの人も支障なく入場し鑑賞できる環境を整えた。さらに、未就学児も入場でき、のびのびと鑑賞できる「靴脱ぎフラットエリア」、大小さまざまな椅子を準備し、鑑賞者の気に入った場所で公演を楽しめるようにした。その結果、赤ちゃん連れのお母さんも落語を楽しみつつ、赤ちゃんはフラットエリアで「はいはい」で動いたり、一緒に拍手したり、その一方で、落語好きなご年配の方々も、この事業の趣旨を理解し、楽しんでおられた。

前日には、学童保育所2カ所で、アウトリーチとして小学生と学童スタッフを含む190人が、子供向けの落語会を堪能できた。全国的に子供を中心としたオミクロン株大流行直前の時期であったにもかかわらず、集会所に高座を作り上げ、落語の入門としてみんな楽しく聞き入っていた。子供たちも「寿限無」を言える子供たちが多数いたことに驚いた。

当日午前のワークショップは、これもさくらホールの特徴といえる、アートファクトリーと本公演会場の2カ所で同時刻に落語の所作（参加者6人）と紙切り（参加者5人）を開催した。

以上の事業は、未就学児であれば普段は見られなかった鑑賞体験もでき、普段子供たちが同じ時間を過ごしている仲間とホールに来なくても鑑賞体験できたアウトリーチ、落語と紙切りのプロから直接指導をもらいながらのワークショップ体験はみな、地域の文化拠点であるさくらホールならではの事業であったと考える。地方であってもこの文化芸術体験を可能にしている事業の存在は大きい。

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

### ■ 人材養成事業

「いわての演奏家連携育成事業」に関しては、令和3年度に関して一部変更はあったものの、登録した2名の地域アーティストの人材養成事業として終えることができた。当初目標のそれぞれ2回ずつであったワークショップを8回開催できたことも、地域アーティストとして受け入れられ、かつ、申込も多数頂戴したことから、地元を受け入れられ、地域の実演芸術の振興に十分貢献したと考える。登録アーティスト1名が中ホールで開催したコンサートは、自らの Clarinet 出演はもちろん、コンサートプログラムとプロデュース（Clarinet 9 重奏）も行っての開催だった。公演に向けて、率先してチケットを売り、公演の宣伝も行い、地域アーティストとしての自覚を持った活動を十分に行ったといえる。出演者の人数を考慮し、小規模な小ホール開催ではなく、大きめの中ホール開催であったが、目標を上回るお客様を動員できた。地域での自身の活動を受け入れられたこと、コーディネーターとの協力体制やアドバイスを受け入れながら事業を進め、成功裏に終えたことは、地域の文化芸術の発展につながったといえる。

### ■ 普及啓発事業

「こどもの舞台芸術体験事業キッズアート」1年近く続く事業で、歌とダンスの講師陣が首都圏から来館し、行っている。少子化の中、市内各所の児童や園児が集まり、年齢を超えた繋がり、学校を超えた繋がりや集団を形成しながら、子供であってもプロから教わり、学び、実演していく。キッズアートはより興味を持った子供たちが自ら進んで、文化芸術に入ってくる事業であるので、興味を育成して体験させていくということでの未来を担う、地域の文化芸術の発展につながっていると考える。

「みんなART おたがいさまライブ事業」こちらの事業は、誰もが一緒に舞台芸術を楽しむことのできる機会、舞台芸術の表現に触れる機会の提供を行っている。毎年、企画内容を見直すことで、興味の間口を広げる事に繋がり、未就学児から大人まで楽しめる内容を継続することが、地域の文化芸術の発展になっていると考える。

「アウトリーチ事業」2006年度より15年間、147回にわたるクラシック音楽のアウトリーチ事業はさらに継続するとともに、令和3年はみんなART出演者のアウトリーチ（※キッズアート講師陣は中止）も開催した。ホールに来られなくても、文化芸術に触れるきっかけづくりとしてのアウトリーチ事業は、地域におけるまさに、文化芸術のすそ野を広げていく土台作りであり、岩手県内でも最も多くのアウトリーチをこなすことで、さくらホールの存在意義は大きいと考える。

「クラシック音楽普及のためのコンサート事業」令和2年度計画して、中止とした2回のコンサートを実施できた。2008年よりのべ51組の演奏者が、小ホールで開催している人気の事業であり、今回も好調な売れ行きであった。「ユーフォニアム・リサイタル」出演していたアーティストが、曲間で自身の話や曲の解説を楽しく語るなど、飽きさせないプログラム構成となっていた。そのお話の最中に、せき込んだお客様がおられ、休憩中にもかかわらず自身の飴を取りに戻り、そのお客様に手渡ししたというエピソードがあった。小ホールであること、その舞台づくりも、さくらホールならではの距離も近く、コンサートの一体感が醸成されている。「新 KOOROGI マリンバお披露目リサイタル」もアダムス社のマリンバと2台並べてのコンサートを開催できた。この事業の特徴は、会場は小さくても、演奏を見聞きすることはもちろんであるが、それ以上に、演奏者自らが話す言葉やその人柄にも触れられる機会を提供できていることが、人気の理由であるとも考えられる。この事業もまた、地域の文化芸術の発展につながっていると考える。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

#### ■ 持続性を支えるさくらホールの特徴と財政面の考え方

当ホールは、開館以来、「日常的に文化芸術活動が展開し、にぎわいのある場」を目指し、その実現のため、「アートファクトリー」という 21 室のファクトリー諸室を備え、そこで市民が創作活動を行い、創り出された作品を、ホールで発表し、その感動が新たな創造を生み出すという、「芸術の循環」を目指し、活動を展開してきた。

ホール内の広いフリースペースを、コロナ後は、一部の椅子を撤去し、数を減らす制限を加えてきた。それでも、多くの市民が訪れ、ファクトリーを活用した様々な文化芸術活動が常に行われた。令和3年度稼働率は、およそ 86%（コロナ前 91%）とそれでも高く、利用料金全体の 4 割がファクトリーからの収入となっている。平均すると毎年およそ 7 千万円の安定的な利用料金収益の確保につながっており、今年度は事業収益もある程度確保できたため、6,550 万円まで戻ってきている。また、利用料金制を導入し、その用途については、市との協定において、自主事業の実施に限定し、自主事業の事業費とそれに係る人件費に充てることとなっていること、また利用料金の減免措置がないことも、安定した独自の事業運営の継続に役立っている。当期経常増減額も黒字で終えることができた。これは貸し館等の大規模イベントの中止が相次いでも、一番の特徴であるファクトリー諸室の利用が続いているということである。コロナ禍においても、少人数の活動は続いて利用料金収入を得られ、事業への再投資が可能となっていることが強みである。

#### ■ 持続性を支える組織の特徴

企画事業課が事業を推進しているが、令和3年度5月より育休明けの職員が復帰し5名体制になり、人材養成事業、普及啓発事業により手厚く人材を投入することができた。復帰した職員の経験と新たなアイデアがさらに事業立案に力を発揮してくれている。余談ではあるが、専用の企画事業課室を設置されたことにより、個々のコミュニケーション、事業スケジュール、協力体制が強まったこともあり、働き方改革にもつながったことは大きい。

オリジナル舞台製作を可能とする、心強い舞台技術課も貴重である。こちら令和3年4月より1名の職員を迎え入れ4名となり、常駐舞台職員5名も加わり9名体制で、自主事業はもちろん、地域の文化芸術の思いを形にしている原動力となっている。職員、常駐者分け隔てなくサービスの均一化や確認事項、事故防止等の会議を毎月行っている。

利用サービス課は、お客様受付、お問合せ対応が中心であり、地域の文化芸術を印象付ける、まさに顔となっている。事業のみならず、1時間単位で借りられる、ファクトリー利用者にも誠実な対応を行っており、さくらホールが持ち合わせている大きな特徴といえる。

総務課は、予算管理や施設管理はもちろんであるが、北上市とのパイプ役であり、開館以来、設置者である北上市との会議を毎月必ず開催することで、お互いに問題の共有化や情報交換を行うことで、このことも北上市の文化芸術振興に役立っていると考えられる。

毎月の職員全体会議や役員との会議を通じて、組織としての確認事項も取れている。

以上が、組織活動を支える収入と、それを動かす組織活動がこのホールの最大の強みであると考えられる。